

名 誉 会 員 追 悼



故 名誉会員 萬谷志郎 先生

社団法人日本鉄鋼協会 名誉会員、東北大学名誉教授、工学博士 萬谷志郎先生は、平成21年9月16日ご逝去されました。享年79歳。謹んで哀悼の辞を申し上げます。

先生は、昭和28年3月に東北大学工学部金属工学科をご卒業、昭和33年3月に同大学院工学研究科金属工学専攻博士課程を修了され、東北大学より工学博士の学位を授与されておられます。博士論文は、「高炭素濃度側における熔鉄中の炭素と酸素の活量に就いて」と題するものであり、鉄鋼製錬における最重要の基本系のひとつである溶融鉄-炭素-酸素系の熱力学を精緻に解明されたものです。ここで明らかにされた溶鉄中の炭素と酸素濃度の関係は、後に「萬谷一の場合カーブ」として有名になり、日本鉄鋼協会俵論文賞を受賞されました。先生はその後、昭和33年7月に東北大学工学部助手に採用され、昭和35年に講師、昭和37年に助教授に昇任され、昭和41年より米国マサチューセッツ工科大学にてResearch Associateとして2年間の留学生活を送っておられます。当時鉄鋼製錬物理化学の世界最高峰と目されたJohn Chipman先生の下で研究に没頭され、計6編の論文を世に出されました。このうち、「Sulfur in Liquid Iron Alloys」、「Thermodynamics of austenitic Fe-C alloys」は、地味な冶金工学の論文であるにもかかわらず、平成7年頃の調査では被引用度が150件程度に達しており、精密で信頼できる基礎データの提供がいかに重要であるかを自ら証明された重要なご業績と思います。MITからご帰国後、昭和45年8月に金属工学科化学冶金学講座教授に昇任され、昭和55年4月からは、鉄冶金学講座、後の鉄鋼製錬学講座をご担当。平成5年3月に東北大学をご退官となり、同年4月に秋田工業高等専門学校校長にご就任と同時に、東北大学名誉教授の称号を授与されました。平成11年3月に秋田高専をご退官になり、同日、同校名誉教授の称号を授与されておられます。

このようなご経歴の中、萬谷先生は、一貫して鉄鋼を中心とした金属製錬工学に関する基礎研究に従事してこられ、多大な功績を挙げられると共に、この期間を通じて教育と指導により多数の研究者及び技術者の養成に尽力してこられました。ご研究面では、鉄鋼製造プロセスに係る製錬反応の熱力学、高温不均一系反応速度、高温熱量測定、スラグの構造解析、スーパーアロイやスクラップ精製に関する物理化学的研究など、極めて広い範囲にわたる基礎的研究であり、その研究成果は約200編の原著論文として発表されています。中でも正則溶液モデルによる鉄鋼製錬スラグの熱力学的性質の定式化は特筆すべきご業績であり、今日でも鉄鋼製錬学分野における世界的権威として知られておられます。

一方学外では、本会副会長、学術審議会専門委員、日本学術振興会製鋼第19委員会製鋼反応協議会主査など、鉄鋼、金属・材料工学アカデミアの要職を歴任されました。また、第4回溶融スラグとフラックスに関する国際会議、並びに鉄鋼製錬の基礎に関する日本・ドイツセミナー組織委員会委員長などを務められ、学術の進展に尽力されました。さらに、全国大学材料関係教室協議会会長として、材料学の教育を全国的立場から推進されました。晩年におかれましては、金属博物館館長として、材料科学の啓蒙活動にも大きく貢献されました。以上のような優れた研究成果に対し、本会俵論文賞、西山記念賞、西山賞、山岡賞をはじめ、日本金属学会功績賞、谷川・ハリス賞、日本学術振興会功労賞など、多数の賞を授与されておられます。また、昭和60年には中華人民共和国東北工学院名誉教授、平成8年には日本金属学会名誉員、平成11年には本会名誉会員の称号を授与されておられます。平成9年には日本政府から紫綬褒章、平成16年秋の叙勲において旭日中綬章を授与されました。

先生が鉄鋼科学技術と本会の発展に尽くされた多大なご業績に感謝し、会員一同喪心からの哀悼の意を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2009年12月

日本鉄鋼協会 会長 友野 宏